

乳幼児期の育ちと保育を考える

2007
3

幼児の教育



最 新 刊

どろんこ保育

塩川寿平 著

子どもが「どろんこ遊び」に没頭するのはなぜなのか。
保育現場での
40年間にわたる
実践と研究から
「どろんこ保育」が
子どもに働きかける力と魅力、
そして重要性について、
さまざまな角度から
明らかにします。

26×21cm

96頁

定価2,100円（税込）



399-00

【目次から】

- 第1章 どろんこ保育はどこからきたか
- 第2章 どろんこ保育 5つのかたち
- 第3章 どろんこ保育 事例集
- 第4章 どろんこ保育入門
- 第5章 どろんこ保育を理解するためのブックガイド

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育



第 106 卷 第 3 号

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第106巻 第3号

もくじ

● 卷頭言

目に見えない成果を評価すること

米田俊彦

〈特集〉 卒業によせて

新しい春を前にして

宮里暁美

子どもが自分らしく生きることを願つて

玉木喜美子

はじめの一歩 金子めぐみ

卒業式

高橋陽子



林 健造

保育の傑作「人形のお家」

● 予どもと保育の情景 (3)

子どもが「善惡」を感じるときを、 戸田雅美
その傍らにいること

● 児童学からの出発 (4)

子どもの力・親の力に支えられて その一 馬場教子

— 東村山市幼児相談室 —

● 幼稚園百三十年記念企画 アーカイブズ『幼児の教育』 (8)

編集部

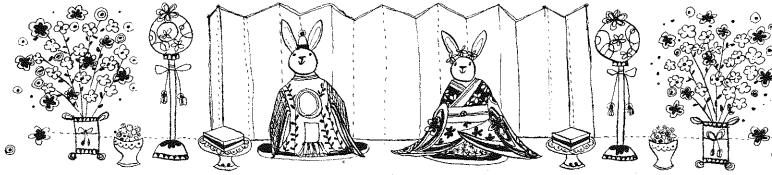
● お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (3)

佐治由美子・菊地知子

五月の一週間

● 「遊び」・「保育」・「発達の保障」再考への契機 —





卷頭言

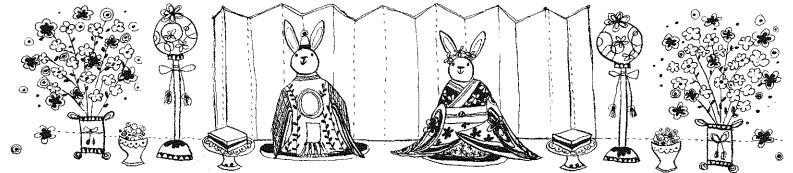
目に見えない成果を評価すること

米田俊彦

私事で恐縮ですが、私は子ども二人を八年間にわたって保育所に預けてきました。

まもなく下の子が小学校になりますので、親子そろって卒園です。通わせている公設公営の保育所が建て替えを機に運営を民営化することになりました。ここ数年、民営化の意味や是非をめぐる保護者の間での、あるいは保護者と行政との間での議論にかかわってきました。保護者会の役員をやつたり、公設民営化方針を策定するための市役所内の会議を毎月傍聴したり、保育士さんたちの自主的な学習サークルに顔を出させていただいたりもしました。これらの経験を通じて、公設民営化そのものに疑問をもつとともに、保育の仕事の困難さと重要性とが、いかに社会的に理解されていないかを痛感させられました。

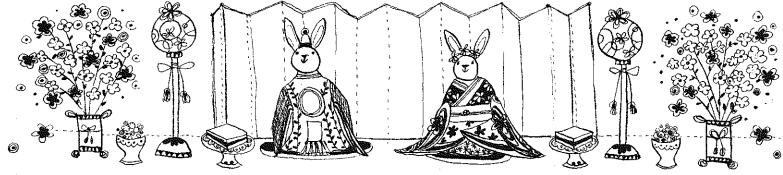
公設民営化は、突き詰めていようと、民営委託すれば人件費を大幅に削減できるとい



うところから出てきた方針です。そこには、人件費を削減しても保育の質が維持できるという前提があります。これには賛同できません。ある会議で、「長く仕事を続けられない賃金にしたら若い保育士ばかりになる。それでは先輩を見習うことも、あるいは先輩から指導されることもなくなり、若い保育士が成長できなくなるのではないのか」という批判が出ました。それに対して、研修を充実させる、きちんとしたマニュアルを作れば大丈夫、といった耳を疑うような行政の説明も聞きました。

公営保育所に子どもを預けている保護者の多くは、たとえば字を読み書きができるようになる、泳げるようになる、歌が上手に歌えるようになる、といった具体的で目に見える成果を求めているわけではありません。毎日友達と過ごすなかで、からだや心が成長し、社会性を自然に身につけていくてほしいと素朴に願っています。そして成長途上での困難やつまずきが生じた時に、適切に対処し、あるいは保護者にアドバイスをしてくればありがたいと思っています。その子なりに自然に元気に育つこと自体が難しくなっていますから、保育の仕事の責任も重要性も増していると思います。しかし、目に見えない成果を評価する目をもたない人たちには、そういう議論が通じないのでしょう。

私は専門が教育史で、授業の中で、第一次世界大戦（一九一四～一八年）の頃から



の新教育運動を扱う時に、必ず池袋児童の村小学校から発せられた次のメッセージを紹介することにしています。

今の教育上の制度組織は、だいたいにおいて資本主義に支配されている。教育を教育とせず、商業か工業のようにやつてゐる。たとえば一人の教師が一時に一定の場所で、七十人八十人の児童を教えようというがごとく、なるべく最少の資本をもつて最大の効果をおさめようというのである。教育が教育の原理に支配されず、経済の原理によつて動かされてゐるのである。その効果というようなことも、すぐ眼の前に表われてくるような結果をさすのであって、ちょっと眼にふれない結果——たとえば人間の感情がどれほど純美高雅となつてきたかななどということは計算の内には加えられない（『私立池袋児童の村小学校要覧』（教育の世紀社、一九二四年）の「七　『児童の村』の教育実況（その一）」より）。

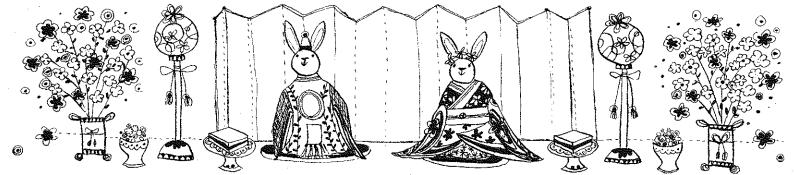
詰込主義、画一主義への批判の文脈で語られていますから現代の状況とは違いますが、目に見えない成果を大切にすべきことがはつきりと語られています。この小学校では国の定めたさまざまな基準を無視する形で、クラスの人数を少なくしたり、「小鳥とり」、汐干狩り、小川の漁り、喧嘩、せり合い、あらゆる自然と人事のできごと」

を「題材」とした、徹底した子どもの生活中心の教育を実践したりしていました。この文章が書かれてから八〇年以上が経過していますが、目に見えない成果を大切にする意識が高まっているとは言い難いと思います。

目標を設定し、そこにどの程度到達したかを評価し、その結果に比例させて今後の資源の配分を決める仕組みが教育の世界にも広がりつつあります。しかし、教育の世界には目に見える成果だけでなく、目に見えないけれども大切な成果もたくさんあるはずです。目に見える成果は評価しやすく、目に見えない成果は評価しにくいから評価しなくてもよいということになってしまったら、目に見える成果を出すことにだけ意識を傾倒するようになります。しかしそれではまともな教育にはなりません。

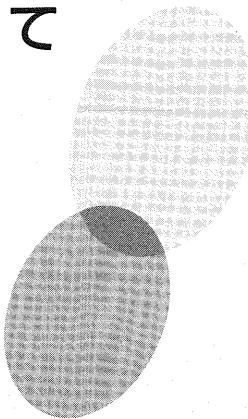
幼稚園と保育所の一元化、一体化が進んでいます。そのこと自体の是非はともかく、保育の仕事、とりわけその目に見えない成果に対する社会的な理解が不十分なままに制度が大きく変わっていくと、それを契機として、成果主義の導入と財政支出の抑制が一段と進展するのではないかと懸念されます。社会全体が冷静さを取り戻し、保育や教育の仕事には目に見えない成果が多く存在すること、そして目に見えない成果こそが大切であることが広く理解される必要があり、そのことを強くアピールしなければならないと思っています。

(お茶の水女子大学)



〔特集〕 卒業によせて

宮里曉美



子どもたちへ寄せる思い

「今」という時を惜しむようにして、子どもたちは遊びます。

園庭の霜柱が溶け、日差しが柔らかくなる頃、幼稚園は「しゅっぱつ」の準備で忙しくなります。幼児園生活を終え、新しい生活へと「しゅっぱつ」する準備です。

修了に向けていろいろなことに取り組みながらも

特集

鬼ごっこが始まりました。次々に仲間が増え、子どもたちだけで遊びを進めています。左右に分かれて陣地をつくり、互いに守っている宝を奪い合うと、いう鬼ごっこです。

子どもたちの目が鋭くなり、素早い動きで宝へと近づいていきます。守る動きと攻める動きがぶつかり合い、二人の子どもが転びました。

「大丈夫！」と思いつ、走り寄ろうとしたその時、転んだ一人は何事も無かつたかのように笑顔で立ち上がり、また遊び始めました。

走り寄ろうとした動きを止め、子どもたちを見つめる私の胸に、たくさんの思いが浮かんできました。子どもたちと過ごした日々をたどりながら、

あの子も、この子も、本当に大きくなつた」といふ、うれしい思いに包まれます。

そして、またゆっくり自分の中に浮かんでくる思いがあります。子どもの「今」にその都度向かい合

いながら、悩んだり喜んだりした日々を思い起こし、あの時の自分はせつかではなかつたか、あのかかわりは不適当ではなかつたかという思いです。子どもに謝りたいという思いも浮かんできます。それでもう一度、輝く笑顔で遊んでいる子どもたちの姿を見つめ、過去にさかのぼり、それを訂正しようと/or>している自分の小ささを恥じる気持ちになります。

子どもたちは、「今」を生きています。この喜びの中に、素直に立ち合うことが、今、保育者としてできる精一杯のことなのでしょう

子どもたちは、いつも今という時を、ただひたすらに生きているのですから。

お茶を味わう・花を贈るという行為を通して

以前勤務していた園では、三月三日にお茶会を開いていました。

いつもは積み木や巧技台を組み立

て遊んでいる遊戯室に、畳が敷き

詰められ琴の音が響いています。雛

人形も飾られている部屋に、十数人

ずつ順番に入り、お茶をいただきます。



お手伝いのお母さんがお茶碗を下げにきます。
畳に両手をついておじぎをします。

何もかも初めての体験という子どもがほとんどか
もしれないお茶会でした。修了を間近に控えた子ども
もと一緒に並んでお茶をいただきながら、静かで豊
かな時間の中に成長を感じさせるものがある、と感
じました。

すっかり様変わりした遊戯室に足を踏み入れるだけ
で、子どもたちの背筋がすっと伸びてきます。和
服を着たお茶の先生が、静かなしぐさでお茶を点て
ています。それを正座した子どもたちがじっと見て
います。

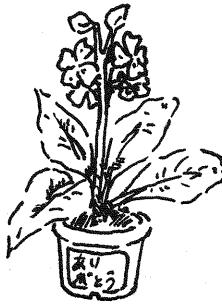
「はい、どうぞ」と差し出されたお茶を、子ども
たちはいただいていきます。

幼稚園で種から育てた桜草の鉢を、お世話になつ
た近隣の方に届けにいくという取り組みもしていま
した。

小さな花をつけた桜草の鉢を持って、数人の子ども
もと園長先生が近隣の家を訪ねていきます。

大きなお茶碗を両手で包むようにして持ちあげ、
神妙な顔で口をつけます。柔らかく泡だつた抹茶
は、少し苦い。その苦さは、初めての体験として、
子どもたちの中に拡がっていきます。

子どもたちに月見団子の作り方を教えてくださつ
たおばあちゃん、コマ回しを教えてくださつたおじ
いちゃんなど、幼稚園の生活の中に、たくさんの方
との出会いや、かかわりがあつたことを改めて感じ



ます。

「幼稚園で育てた桜草です」「いつもありがとうございます」と、子どもたちの言葉を、優しい笑顔で受けとめてください。

桜草と一緒に修了式の招待状を届けると「もうすぐ一年生なの。うれしいでしよう！ がんばってね」「修了式は必ず行きますよ」と声をかけてくれます。

花を届けた帰り道、「よかつたね」「喜んでくれたね」「修了式を見に来てくれるって言つてたね。みんなにも教えなくちゃ」と弾んだように子どもたちは話しています。うれしい気持ちに包まれています。

子どもたちへ伝えたいこと

修了式の中で証書を受け取る前に、子どもたちが一人ひとつこと、楽しかったことやがんばったことなど心に残っていることを話すという取り組みをしたことがあります。

三月、自分は何を話すのかを考えるよう投げかけると、子どもたちは自分が考えたことを言葉にしていました。

「なれどひが跳べるようになつたことがうれしかつた」「積み木で遊ぶのが好きだつた」「劇で大きい声でセリフを言つて、ドキドキしたけどうれしかつた」など、言葉は一人ひとり違います。「やつ

ぱり○○にしようかな」と、話すたびに内容が変わる子もいました。どの子も「自分は何を言おうか」と一生懸命考えていました。

修了式の練習が始まると、しっかりと言えるだろうかと不安になる子どもの姿も見られ、私は、子どもその後に立ちながら、言葉を思い出せるように助けたり、大丈夫だよと声にならないメッセージを送り続けたりしました。

子どもたちの姿を見つめながら、「自分のひとつことを言うことの意味は何だろう」と考えました。修了式が間近に迫ったある夜、私は学級通信にその思いを綴ることにしました。

修了式の中で言うひとつことを、自分で考えたね。

楽しかったこと、がんばったこと、うれしかったこと、さくら組さんに伝えたいこと。自

分は何を言おうかなと、しっかりと考えて決めたんだよね。

自分にしか言えないひとつことがある。うれしかったのも、悲しかったのも、自分なんだから。「自分」が大切だと、先生は思っています。練習で、言葉が言えなくなつて、泣きそうになつた友達がいたね。

その子のひとつことは、その子にしか言えないから、誰も替わつてあげられない。

「だいじょうぶかな」。そう思いながら、じ一つと見ていたね。心で応援していたね。

がんばって、ようやく言ったひとつことは、とっても小さい声だった。だけど、一生懸命言つたひとつことだつた。ほつとして、そのあと、思わず拍手をした。「よくやつた!」と声をかけた人もいた。うれしいなつて、先生は思つた。『友達』がいるつていうことは、本当

特集 ⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆⋆

にうれしいことだな、と思つた。

『自分』と『友達』両方を大切にして、大き

くなつていつてね。ずーっと応援しています。

*学級通信「だんごむし」28号より抜粋

原文は子どもが読めるようにひらがなで記載

この学級通信を書いた時のことを思い出します。

あなたのひととことを、そんなふうに大切に聞いていますよ！ 応援していますよ！ と私は伝えにはいられませんでした。そして、応援する気持ちはずっと続いていますよ、ということを。

幼い頃、楽しく過ごした場所は、人の心に大切な宝物として残つていきます。誰もが安心して戻つてくことはできない場所として、幼稚園は有り続けなくてはならない、と思います。

修了する子どもたちを見送る気持ちは、その時だけにはとどまりません。小学生、中学生、高校生と大きくなつていく、そのずっと先までへも続いていく思いでです。

百年以上の歴史をもつ幼稚園に勤務していたことがあります。毎年開かれる同窓会の中で、ご高齢の

方がとてもなつかしそうに幼稚園の話をされるのを聞きました。

「私は折り紙が苦手で○○さんに作つてもらつたんだよねえ」とその頃の思い出を話す顔は、いたずらっ子の顔になります。園庭にある土管のトンネルを見つけて「この中で遊んだよなあ」と、目が潤んでいます。「遠くに引っ越しても、久しぶりに幼稚園の前を通ると、ああ幼稚園だ、とうれしくなつた」と話された方もいました。

(練馬区立光が丘さくら幼稚園)

子どもが自分らしく生きることを願つて

玉木 喜美子

卒業式

愛育養護学校の卒業式は、毎年「春分の日」としています。昨年度は、五名の子どもたちが卒業を迎えました。在校生が二十数名の小さな規模の学校です。学校の中心に位置するホールに卒業生とその家族、職員が円形に座り、在校生と保護者、実習生らの見守る中、一人ひとり名前を呼ばれ、校長の前に進み出て卒業証書を受け取りました。子どもたちの卒業遠足の時の記念写真と日常生活でのその子らしい表情の写真をパネルにしたもの、そしてアクリル絵の具を使って制作した個々の絵画作品が紹介され、記念として贈られます。彼らも先輩たちの卒業式に参加し、卒業の光景を見てきました。

今、皆からの温かい祝福を受け、子どもたちの顔は期待に輝いています。中学生になるのだという前向きな意欲が感じられ、実に堂々としていました。在学中は、それぞれの子どもが本当に自分らしく、個性を發揮して活き活きと生きることを願い学校生活を共に過ごしてきました。

子どもたちは慣れ親しんだこの学校を巣立ち、新しい次の場所へと一步を踏み出しました。個性豊かな一人ひとりは、この学校の雰囲気をつくるのにひと役かってきました。大袈裟に聞こえるかもしれないが、彼らが卒業し、長い年月担任してきた私は、また一つの時代が終わるようを感じられ、寂しさや安堵感など、さまざま思いが湧き上がってきた。

中学校で直面すること

終的に学校を決めていきます。

愛育養護学校は港区にあります。私学の学校という性質上、子どもたちは東京都内はもとより千葉県、埼玉県、神奈川県など毎日通うには遠い地域からも通ってきます。その為、中等部のない本校を卒業すると、多くの子どもたちは地域の公立の養護学校や心障学級に進学します。この年も五名のうち四名が都立の養護学校に、一名が国立大学附属の養護学校に進学しました。

子どもの中学進学を控えた保護者は、学区域を中心にお公立、私立の養護学校、心障学級を何校か見学します。同じ公立の学校でも一校一校学校の雰囲気や教育に対する価値観が違うためです。進学先を決めるポイントは個々の家庭によって異なりますが、どの家庭でも子どもが喜んで通える学校ということは共通していると思います。子育てをしてくる中で大切にしてきたことや教育観に大きなずれはないかなどを検討し、子どもたちも体験入学を経験し、最

ます。大きな違いとしてあげられるのは、授業の形態が全く異なることです。本校には時間割がなく、子どもが登校してから下校するまでの間、子どもの自発的な発想で活動が展開しますが、他校では時間割があります。特に中等部になると、高等部卒業後の進路を視野に置いてるので、作業学習（働く力の基礎を育てる）が授業科目の中に組み込まれます。そして授業は、教師が年間指導計画を立案し、教師主導の課題提供と環境設定、教材準備などをもとにすすめられます。

物理的な面では、何よりも学校の規模が違います。本校は二十数名の家庭的な規模で、どの子どもの様子もわかる人数です。しかし他校では、小中高をいれると二百名前後が一般的です。その人数を受け入れる器（建物）も当然大きくなります。

そして、公立の教師には転勤があり、教育観も個々さまざまです。教師間で互いの教育観を突き合

わせ相談しながら授業をつくりていきます。私学の
ように学校の教育方針に賛同する方だけが入学を決
めるというわけではないので、教師は親の多様なニー
ズに応えることを求められます。以上にあげたよう
な大きな環境の変化が待っている中に、本校を卒業
した子どもたちは新たなる一歩を踏み出したのです。

学校に行きたくない

四月になつて新学期がスタートした頃、それぞれ
どんなふうに学校生活を送つているのか、家庭の方
からの報告を聞くことを楽しみにしていました。ま
た、子どもたちがさまざまな違いに直面しながら
も、中学校の新しい生活に前向きにチャレンジし
て、楽しく通うことのできる自分の場所にしていく
ことを願っていました。

一人の母親から、「しょう子（仮名）が学校に行
くのを嫌がるのです」という電話が入りました。こ
の子どもの進路については最も慎重に考え、進学を
予定する地域の学校に、親子で何度も見学を行つて

もらいました。本人も期待をもつて中学進学を希望
しました。しよう子は生まれつき、心室中隔欠損症
という重度の心疾患を抱えていました。右心室と左
心室の壁に穴が空いており、手術のできない箇所で
した。充分に浄化されない血液が心臓から血中に送
り出され、酸素が身体の末端まで充分に運ばれませ
ん。そのため、体温の調節がうまくいかなかつた
り、特に寒い時期には顔色が悪く、手足が冷たく
なつたりしてしまいます。それに加え消化機能も弱
く、体調が下降気味になると、食べ物を取り込んで
も吐いてしまいます。

そのような身体の状況にもかかわらず、しよう子
の素晴らしさは、生きようとする意欲が人一倍旺盛
であつたことでした。生まれた時の状況が思わしく
なく、医師からは、長くは生きられないだろうと伝
えられていました。両親は「未来のこと目に目を向け
るのではなく、今ある一日を楽しく喜びをもつて生
きられるように」と願い、子育てにあたつてしまし
た。生きることへの前向きさや人にに対する信頼の気

持ちは、こうした両親の想いの賜物だと思います。

本校の一年生として迎え入れた時、何よりも大切にしたいと思つたのは、しよう子のこの輝きでした。

愛育養護学校では、子どもが自ら選んだ活動を深く掘り下げ、やりきることができるよう大人がサ

ポートするという授業の形態をとっています。身体的に思うようにならないことがあつても、本人の自由意志をできるかぎり尊重し、生きる意欲を損なうことのないよう心がけてきました。精神力が身体を支え引っ張っていく様子が、しよう子を通して体現されていました。

前向きに生きようとする意欲こそが元気の源なので、大きな環境の変化により、ストレスが身体面にどう反映されるのか予測できない点が最も気がかりでした。小さなしよう子にとって、中学校は大きなものに映つたことでしょう。クラスメイトとの身体の差も歴然としていました。相手の子どもが興味をもつて近づいてきて、その触れ方の荒々しさに萎縮してしまったなど、中学校での生活は驚きの連続だつ

たようです。また、現在の活潑で明るく元気な様子しか知らない担任教師には、これまで両親がどんな想いで生死の際にいるしよう子を育ててきたのか、その過程を理解し、親の想いに心を寄せるのは難しいことでした。

中学校での学習の指向性は、「その子の望ましい未来像を見据えて課題目標を設定し、それに向かって努力する」という考え方を基本としていました。そのため、親の考える「今、しよう子が意欲をもつてやりたいと思うことを充分にやりきることで、結果として本来備わっている力が培われ、發揮される」という価値観は、なかなか理解されなかつたようです。個別指導計画を立てるための面談の席で母親が「まず、この子の心がワクワクと楽しく過ごせることを大切にしてほしい」と伝えると、担任から



は「もつたいないです」、という言葉が返ってきたことに母親はがっかりしていました。こういった親と教師の間での、子どもを育てていく過程で何を大切にしていきたいかという価値観を共通の理解にしていく作業が最も難しく、時間を要します。初めて出会う人間同士であるから当然のことであり、両者とも子どもの幸せを願つてのことなのです。

しばらくしよう子が学校へ行くことを選ばない間、「いつでも愛育に遊びにいらっしゃい」と声をかけると、週一回のペースで放課後に遊びにきました。自分が学校に行けないことが母親の悩みになつていることを感じているその表情は曇りがちで、何

げない所作の中にも母親への気遣いを感じられました。家で過ごす毎日は、さまざまな工夫をしながらも、活力のあるしよう子にとってはもの足りず、母親と二人では煮詰まってしまいます。

そこで、母親が授業中にずっと付き添つことを約束し、本人も納得したうえで一週間学校へ通いました。その後の会話では、「一週間を過ごしてみ

て、しよう子の体力ではとてもついていけないことがわかりました。あれでは死んでしまいます」と話されました。一緒に授業を体験する中で得た、母親の実感のこもった言葉でした。その後、「毎日学校へ行く」という心のとらわれから解放された母親は、「週二回～三回のペースがしよう子には無理がないと思います」とふつきた様子でにつこりと笑いました。しよう子もそんな母親の変化をキヤッとして、毎日行かなくともいいのだ、本当に行きたいと思つた時に自分のペースに合わせていけばいいのだと、心から思えたことでしょう。

学校とは……本当にその子らしい生活とは

九月にはいつて間もない頃、しよう子の母親から電話をもらいました。「この一週間、いろいろあつたんです。うれしいこともありました！」と声が弾んでいます。内容は次のようなことでした。地域の有料老人ホームに面接に行き、親子二人で週二日、午前中だけボランティアをすることになつたこ

と、また今週は中学校に三日も行けたのだということでした。「老人ホーム!?」なんて彼女にぴったり合った場所を探されたのだろう」と、この話を聞いた私の方がうれしくなって、「しよう子さんがね、老人ホームでボランティアだつて!」と職員のみんなに言つて回らずにはいられませんでした。

しよう子が熱心にしていたことの一つに、衣類を畳み直すという活動がありました。学校の着替え用の衣類から、たくさんの中古衣類を全部取り出し、それらを一枚一枚広げて重ねると衣類の山ができます。その山から一枚をとつて手元に広げ、もう一度丁寧に畳み直すのです。三年生の頃から特に熱心に時間をかけて行い、六年生まで続けた活動です。卒業の頃には大人も顔負けするくらい、袖の部分の返しなども上手に畳めるようになっていました。

しよう子の得意なことが老人ホームのおむつ畳みなどに活かされるのです。そして彼女の届託のない明るさが場に活気を与え、老人たちの心を和ませます。老人たちにありのままの自分を快く受け入れて

もらうことは彼女にとつても喜びで、老人の生活のゆつたりとした雰囲気が心地よい居場所になつているようです。双方にとって、活かし活かされる関係が生まれました。いま彼女は週一～二日のペースで学校に通いながら、老人ホームでボランティアをするという生活を送り始めました。

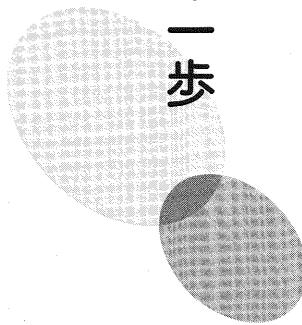
ボランティアについてはもちろん学校の単位には数えられません。老人たちに受け入れられ交流をすることからしよう子は何を学ぶのでしょうか。この安らげる時間は、心にどんな変化をもたらすのでしょうか。改めて「学校とは?」「自分らしく生きることとは?」と考えさせられました。これからもしようと子がどのような成長を遂げていくのか、楽しみに見守つていきたいと思います。

今年も三名が愛育養護学校を卒業します。子どもたちは前向きに今を生きています。私もまた、四月に迎え入れる子どもたちとの生活に心を向け、子どもたちと共に、自分らしく生きることを目指していきたいと思います。

(愛育養護学校)

はじめの一歩

金子めぐみ



昨年三月、二年間担任した子どもたちの卒園とともに、十一年間勤めた幼稚園を退職しました。結婚、出産、夫の転勤などで職場が変わり、四回目の退職です。

その間、たくさんの卒園児を見送りました。卒園式は何度経験しても、寂しいものです。子どもたちを卒園させるたびに、この子どもたちは今まで受けもつた中で一番かわいい。もう、これ以上かわいい

子どもたちには出会えないだらうと寂しさでいっぱいになります。それでも、四月に新しいクラスを担任すると、またその子どもたちの魅力に夢中になるということを繰り返してきた気がします。

卒園式で子どもたちが歌う歌の中で、私が大好きな歌があります。「はじめの一歩」という歌です。ご存知の方も多いと思いますが、特に気に入っている二番の歌詞を紹介します。

信じることを わすれちゃいけない
朝は おとずれるから
かなうはずだよ

どもたちと過ごした日々が次々思い出されます。そして、この歌のように、子どもたちに、勇気をもつてはじめの一歩をしつかり歩みだしてほしいと心から願わずにはいられません。

はじめの一歩 あしたに一歩

きょうから なにもかもが

あたらしい

はじめの一歩 あしたに一歩

生まれかねて 大きく

一步
歩きだせ

詞・新沢としひこ

この歌を聞きながら、卒園していく子どもたち一人ひとりの顔を見つめていると、自然に涙が流れてしまうことがあります。入園の頃、お母さんと一緒に離れ離れなくて、大泣きしていた子どもたち。その子どもたちを不安そうに送り出していたお母さんの顔。子

「い 知らせばかりではありません。毎朝学校に行きたくないと泣く娘を学校まで送つて行くのがつらいところだ」と心配そうに教えてくれる友達もいます。

子どもたちが卒園してからも、小学校で頑張つてゐるかな、友達ができたかな、楽しんでるかなと、いつも気がかりです。

卒園前、保護者の方々は、自分の子どもが小学校に行つても、ちゃんと先生の言うことをきけるだろうか、勉強についていけるだろうか、友達とうまく遊べるだろうかと心配されて、いろいろ相談されたり面談したりしました。

その時よくお話ししたのは、子どものもつている力を信じて、あせらず見守つてあげてほしいということです。初めから何でもうまくいくものではありません。子どもは小学校という新しい世界に飛び込んで、とまどい、不安とたたかいながら一日過ごして帰ってきます。子どもたちは学校でエネルギーをたくさん使つてきます。家ではお母さんが子どもを受け止め充電し、よし明日も頑張ろうというパワーを与えてあげてほしい、とお願いしてきました。

小学校やその後の社会に出ていく前の幼児期に、強く生きる力を身につけることが大切だと思いました。しかし実際には、小学校でよい成績をとるために、五十音や計算の練習などを幼児期から教え込ん

で、子どもたちが困らないように大人は先手先手で守ろうとしてしまいがちです。でも、もつと大切なのは、困難にあった時に逃げないで頑張る力、自分で考える力、自分の気持ちを言葉で伝える力、明日を信じる心のものを育てることだと思います。

もう一つ、卒園児を送り出す時に、最後まで考えるのは、発達に遅れのある子どもたちの進学についてです。私が勤めていた幼稚園では、自閉症、ダウン症など発達に遅れのある子どもたちも一緒に保育する方針で、その年度によつて違いますが、クラスに一、二名受け入れてきました。

年中組に入園した時、自閉症の可能性が高いと言



われていたA君。入園当初、集団での生活になじめず、片づけの時間になつても納得せず遊び続けたり、自分が夢中になつていることを邪魔されるとバニックをおこしたり、じつと座るのが苦手で保育室を走り回ったり大声を出したり……。

保育者もまわりの子どもたちも、どのように接し

でいけはよいのか、試行錯誤の毎日がスタートしました。特に、入園間もない子どもたちにとつては、自分が母親から離れて園生活を送るだけでもやつとのことです。それに加えて、今まで接したことのないような友達A君の出現に、嫉妬したり、力づくで無理やり言うことをきかせようとしてトラブルになりました。

しかし、新しい環境に慣れにくい、自分の興味のあることには熱中するけれど、興味の無いことには無関心である、自分の理解力を超えるとパニックになるなど、小学校で授業を受ける時には困難が予想されました。

同じ自閉症でも子どもによって性格はさまざま
で、保育者にとってもその子その子に合った接し方
を一つひとつ模索する日々でした。二クラスを三人
の先生が担任するというチームティーチングの保育
を行っていました。担任三人で何度も話し合い、ま

普通学級に進学するか、養護学級にするか、または養護学校にするかは、各ご家庭でいろいろな学校を見て回つたり、療育センターの先生と相談したりして、最終的にはご両親が決定されます。どれが正解か私たちにもわかりません。まわりの子どもたちからの刺激を受けたいからと普通学級を選ぶケース、逆に自分の子どもが理解できない授業で、何も

た、担任だけでなく園全体で状況を伝え情報交換し合って、協力体制をつくりました。

わからずお客様のように座っているのは無意味だから、子どもに合わせたカリキュラムで少しづつでも学力を伸ばしたいと養護学級を選ぶケース。いい学校があるからと、わざわざその学校の校区に引越しされる方も少なくありません。

A君は、はじめ養護学校を希望していましたが、実際にいろいろな学校を見学し、普通学級との交流がもてる「なかよし学級」のある小学校を選びました。どんな形であれ、小学校に行って心の安定する居場所を見つけ、その子なりに自分の力で歩いて歩いてほしいと願っています。

年長組の夏休みに、高機能自閉症の可能性があると診断されたB君。お母さんが自閉症について書かれた本をたくさん読み、B君への接し方を工夫したことでB君はとても穏やかになりました。また、得意な图形や積み木、独特の絵などを認めて大切にしたことで、生き生きと取り組むようになりました。

食べ物に対しても極端な好き嫌いがありました。泣きながらでも給食を食べようとする気持ちを認めて励ますなど、保育者と同じ考え方で協力してくださいました。

集団の場でパニックをおこすことも少なく、理解力もあるため、普通学級に進学しましたが、入学前にはきちんとB君の状態を小学校に伝えたことでスムーズに小学校生活がスタートし、あんなに苦手だった給食もなんとか泣かずに食べられるようになったという、うれしいお手紙を頂きました。

でも、卒園してから一度も連絡の無いC子ちゃんのことは、今でも気がかりです。

新しい環境に慣れるのが難しく、年長になつた時、保育室に入ることを頑なに嫌がり、友達をつねつたり、蹴つたりすることでその不安な気持ちを保育者にアピールしようとしていたC子ちゃん。お母さんとも何度も面談し、どうすればC子ちゃんの

気持ちが安定するか話し合いました。隣のクラス（チームティーチング）で同じ担任が受けもつていたもう一つのクラスには抵抗なく入室できたため、そこで過ごすことになり、二学期後半にやっと落ち着き、普通学級に進学しました。

今頃小学校で大変な思いをしているのではない
か、親子で悩んでなければよいがと心配になります。逆に、きっと順調に小学校生活がスタートし
て、今の生活のペースを乱したくないから幼稚園に
顔を出さないだけだろうと思いつ込もうともします。

そんな時も、「はじめの一歩」の歌を思い出しま
す。「信じることを忘れちゃいけない。かなならず朝
はおとずれるから……」今は大変でもきっとC子
ちゃんにも素敵な朝が訪れるから、「C子ちゃん、
お母さん、頑張って」と祈らずにはいられません。

のは卒園式までですが、一緒に過ごした時間が濃
く、かかわりが密だっただけに、卒園し会えなくな
るのはとても寂しく、またやり残したことがたくさん
あるような気がしてなりません。卒園してから
も、どうかその子なりに自分の力で歩いていってほ
しい。そして「お父さん、お母さん、頑張つてくだ
さい。いつまでも応援してます」という気持ちで
いっぱいです。

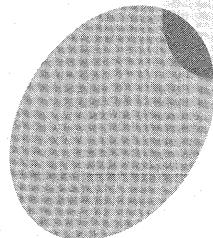
卒園にまつわるいろいろな思い出を書いてきまし
た。子どもたちにはどんな未来が待つてているので
しょうか。卒園して手を離れてしまった子どもたち
ですが、一人ひとりが自分のもつてている力を信じ
て、困難に立ち向かい、悩んでもそれを乗り越え
て、希望をもつて前に向かって進んでいくてほしい
と思います。

「はじめの一歩」この歌を忘れずに、大きく一
歩、歩きだしてほしいと心から願っています。

幼稚園教諭という立場では、その子にかかる

卒業式

高橋陽子



ここのは、ぼくらのようちえん
わたくしたちのようちえん

みんなであそんだようちえん
なかよしじうしのようちえん

(「そのぎょうしき」一番 作詞 倉橋惣三)

慣れ親しんだ園舎をあとにして大学の講堂での卒業式に臨みます。

子どもたちは二年もしくは三年前に、幼稚園の遊戯室で入園式を行いました。縁あつて出会ったなまど保育者と、その日からこの幼稚園で生活を重ねてきました。幼稚園のお庭の自然、広くてまつすぐな廊下、丸みを帯びた天井の梁と重厚な木の床、ステンドグラスの窓に囲まれた遊戯室、どこにいても

特集

守られていると感じることのできる空間の中で、繰り広げられてきた生活。この歌詞のように、自分の幼稚園なんだ、みんなで一緒に過ごしたんだ、といふ思いを抱いて子どもたちが卒業の日を迎えていたとしたら、それは本当にうれしいことです。

り、思つたことを話したり、一緒に考えたりするのは、この日が最後の日なんだと感じてほしいと願つて、歌詞を伝えてきました。

このなかまとの空間にいるのはこの日が最後です。しかし幼稚園も先生もこれからもずっとここにいるからね、ということを伝えて、さようならをしています。

こんどは、しうがくいちねんせい
せんせいさよなら ありがとう

みんななかよしおともだち
もいちどげんきにさようなら

(前出
一番)

晴れやかな自信たっぷりの声で「こんどはしよう

がくいんせんせい」と歌い上げる子どもたちです。いつもの降園時に言う「やようなら」とは違うんだ、一緒に過ごしてきたみんなと遊んだり、みんなで集まって話を聞いたり、困っていることを伝えた

なかまと共に過ごしてきた時間をもう一度共有したいと思い「幼稚園での思い出は何?」と子どもたちに投げかけてみると、「お別れ遠足」「運動会」「ブランコ」「サッカー」など、やつたことをあげていく子どもたちです。

お別れ遠足といふことはを聞けば、場面は子どもによつて違つていても、「みんなで行つた最後の遠足だつたな」という思いが浮かんでくるでしょ。〔運動会〕の中には「チームごとに力を合わせ



て走つたりレー」「クラスで気持ちを一つにした綱引き」といった「なかまと一緒にがんばった」という感覚がよみがえつてくるでしょう。「ブランコ」は、「ブランコ競争」と称してなかまとどちらが高々こげるか競争したり応援しあつたりしたことから地よさとして表れていると感じられます。「ブランコ」にはもう一つの意味のある子どももいるでしょう。それは、友達と上手くいかなかつた時に、一人

ブランコをこいで気持ちを立て直していく、そんな場であつたことを思い出す子どももいるはずです。

「サッカー」はどうでしょう。友達に一番強いと認められて、いつも中心でプレーしていた子どももいれば、チーム分けで嫌な思いをしたり、ボールを蹴ることができずふてくされたり、わからないうちに「レッドカード」が出され、不本意な退場をしたりしていた子どももいました。

一つひとつの出来事にこめられた思いを、私がこ

の場で全て代弁したり意味づけたりすることはできません。ですから一人ひとりの子どもたちに、その時その場で、必要なことを伝えていくことの大切さを改めて思うものです。一人ひとりに投げかけることは、それを一緒に聞いているなかまを意識したことばであり、その先にみんなで一緒に考え解決することができるようになることばでもありたいものです。

幼稚園よりも大きな集団である小学校に入つていった時に、先生は信頼できる人、友達とは一緒に生活していて困難なことにぶつかつても、かかわり合つて何とかしていける存在と思える気持ちをもち続けることができるのではないかと思います。

さて、なかまと一緒に大きな拍手に迎えられて講堂に入り、年長児が着席していよいよ開式です。

「卒業証書授与」のことばで、ぐつと緊張感を高め

る子どもたちがたくさんいます。

クラスの半数ずつが壇上にあがり、下手側に二列で並びます。自分の名前を呼ばれると、式台の前に

立ち一札し、リボンで結ばれた円筒状の証書をいた

だきます。証書を受け取り一礼して上手側を向いた瞬間の、ほつとした顔。肩の力が一気に抜けるのが

わかります。「フツ」とためいきをつく子どももいます。足早に自分の場所に向かい、先に終わり待つていた子どもと笑顔を交わし、今までの緊張と安堵感を分かち合っている子どももいます。

一人ひとりが精一杯手を伸ばし証書を受け取るその姿や友達と交わす表情から、二年ないし三年の生活の積み重ねを感じています。最後の一人が証書を受け取り列につくと、みんなで上手側の階段の方にからだを向けて、先頭から順におり、座席に並んで戻っていきます。

お互いを感じ合って、息を合わせている姿に、み



んなで生活してきて、みんなで気持ちを合わせることの楽しさや大切さを学んできたからこそ、成長を感じる瞬間でもあります。

この日を迎えるために、少しつものの生活とは違
うことをしてきました。

十一月下旬から十二月にかけて、アルバムの表紙の絵を水彩絵の具で描きました。三月十五日卒業式の日に一人ひとりに手渡す卒業アルバムで、自分の描いた絵が自分のアルバムの表紙になつているものです。「幼稚園での思い出や、幼稚園の頃つてこんなものが好きだったんだ、とわかるような絵を描いてみましょうね」と投げかけます。「世界にたつた

一つしかないものになるから、大切な気持ちで描こうね」とも伝えます。絵の具がはみ出してしまつた、滲んでしまつた、思つたように形がとれなかつた、と言つて何度も書き直す子どもがいました。そ

の姿を見ているまわりの子どもたちからは、自然と「今度はがんばってね」と声がかかります。「一番がんばったよね」「一番すごいのができたよね」と、何枚描いても満足しきれずに終わりとなつた子どもたちを汲んで、声をかけていく子どももいました。

大好きな友達と同じに描こうとする子どもや、迷路を描くことが好きで線だけで構成されている絵を描いた子どもには、「自分のつてわかるように、何か工夫してみたら」と勧めてみます。線の間にしつかりと、一つ虫が描かれたこともあります。なんとかそこに、自分らしさを表現してほしい、自分にとつての幼稚園生活を思い出したり、自分は本

当にはどんなことやものが好きなんだろうと向き合つたりしてほしいなど考えているのです。

絵を描くことが本当に苦手で、自信がなくてみんながいるところでは描けない子どももいました。みんなが見ていると、早く終わらせたくてささつと描いて「はい、できた」と言うのです。その時心持ちが表れるものもあるので「あのころの自分は、あんな子どもだった」と振り返ることはできますが、やはりしつかりと向き合つて描いてほしいと願い、三歳児が降園したあとの誰もいない保育室で、ゆつくりとした空間、時間の中で描くようにした子どももいました。

どんな絵を描いたかよりも、どのように取り組んでいたかということが、思い出に残ります。それから、三学期始業式に卒業写真を撮ります。いつもより晴れやかな服装でみんなが並ぶと、いよいよ幼稚園最後の学期になつたという気持ちにさせ

られます。

二月下旬から、アルバムにはさむ絵を描いたり、
アルバムに貼る不^ルムプレートを作つたりもしま
す。「もう少しで卒業だから、アルバムに貼るため

に作つてね」と声をかけると、少しでも遊びたい
けれども、やらなくてはいけないことを先にやつて
しまつた方が気持ちよく遊べるということを心得て
いて、さつさつとやりこなしてしまいます。友達に
「やつちやつた方がいいよ」と言つている子どもも
います。これは、積み重ね以外のなにものでもあり
ません。

子どもたちは、自主的に遊ぶ生活の中で、新入園
児へのプレゼント作りやうちわ作り、てぬぐいの絵
を描く、はごいたやこまを彩色するなどをしてきま
した。自分もやらなくてはいけないとわかっていて
も「あとでやる」と言い続け、本当に今日しかない
という日になつてやつと取り組む子どももたくさん

いました。それが、卒業間近にはずいぶん変わりま
した。自分で生活を組み立てる、先を見通すことが
できるようになつてきたということでしょう。

卒業式当日。子どもたちがいつもとは違う装いで
登園してきました。保育室中央の机に置かれた卒業
アルバムを見つけ「こうなるんだ」とうれしそうな
声。自分のアルバムをしつかり見つけます。友達の
も見つけて声をかけ合っています。

安心できるなかまと一緒に息を合わせて一つのこ
とをやり遂げる楽しさ、大切さを感じることは今まで
に培われてきたことです。子どもたちが自分の成
長を意識してこの日に臨むことができるよう、ま
た入園してきたその日から先生や友達と一緒に生活
を重ねてきたことが、全てこの日に表出されるよう
にと願い伝えながら「卒業式」を迎えるのです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

保育の傑作 「人形のお家」

林 健造

お話の前に

す。それでは残念なので、古い記憶をたどって書いてみます。

私は数え年で九十歳です。十文字学園女子短期大学の学長兼附属幼稚園長の坂元彦太郎先生御逝去の跡、幼稚園長をお引き受けし、満八十歳で退職。現在は画家として展覧会に大作を出品しています。この度、御縁が深く『幼児の教育』の編集部より、菊池ふじの先生の「人形のお家」の思い出話を、とのご要望がありました。このよいお話も、眞実を誰かが後人の為に残していくないと消滅してしまいま

幸運なことに、私を幼児教育界に誘い込んだのは坂元彦太郎先生です。坂元先生は、御自分でもおつしやっていますように、倉橋惣三先生の親友であられたこと。私が、金沢大学助教授から、招かれてお茶の水女子大学児童学科と二年制の幼稚園教員臨時養成課程の講師と、小学校の教諭をしておりました折の校長としておつかえしたこと。十文字学園女子短期大学時代は、私が幼児教育学科の学科長の時、

坂元先生が学長になられたこと。これらの関係で、

絵画、音楽、詩などの芸術に大変造詣の深い先生から、本などに書いていない多くのことを教わりました。

私がお茶の水にお世話になった昭和二十八年は、丁度倉橋先生が御勇退になり、附属幼稚園では、教頭の及川ふみ先生が園長に、教頭は菊池ふじの先生になつておられました。及川先生は姿勢のよい、キッチンとした武家育ち的な立派なお方でしたが、得意のヌリ絵の本の相談などによくひき出されました。

菊池先生は偶然、私と同郷、仙台出身なのです。

私はお茶の水に入った翌日、「あの飯はどこへたのむのですかア！」ときいたら、大橋先生から、「これはお茶の水です。メシなどとおつしやらずにお食事とおつしやつてください」とピシャリ。その前科がありますので、お互に仙台弁で遠慮なく話せる

菊池先生は大助かりでした。

ですから、「人形のお家」のお話も、方言まじりで、心おきなくお伺いしたものです。

このお話の前に、一冊の本の紹介をします。学長

だつた坂元先生が、倉橋先生のこの御本は世にいわれる自由保育・誘導保育など、倉橋先生を知る為に、絶対読んでおくようにと貸してくださいました。これは園の何かの記念出版で、内容は主に保育の実践記録を、それぞれの担任に頼んで書いてもらつた本だから……と。でも倉橋先生は、『幼稚園保育法真諦』というこの本の「真諦」に少しひつかりがおありのようでした。

また、この本には、菊池・新庄・その外の先生の文が掲載され、教頭の及川ふみ先生は、目次の上のカットを描かれており、編集後記に「特に及川先生にはすばらしいカットを描いて頂きました」とありました。他にも、倉橋先生の随分御苦心なさった姿

が拝察されますよと坂元先生が話しておられたこと
も思い出します。

菊池ふじの先生の保育実践

—菊池ふじの先生から伺つたお話—

倉橋先生が園長時代の後半の方でアメリカに留学されました。造形活動などが、日本では折紙で奴さんをおつたりしており、画用紙も子どもに合わせ、一号（ハガキ版）か二号くらいの小さな紙にクレヨンで絵を描かせていた頃、小筋肉から大筋肉を使い、ダイナミックな絵（幼児だから大筋肉を自由に使えるイーゼルとえのぐを使っての描画）や、ドラム缶や段ボールの空箱で機関車を作つたりする活動を学んで帰国され、提唱された時代。アメリカから親善のお使いとしてお人形さんが送られてきました。そのお人形さんを年長の組である菊池先生の組がお世話をすることになりました。

外国のお人形さんなど大変めずらしい時代ですか
ら、青い眼の大きなお人形にそのクラスのお友達は
大喜び、他のクラスの子も羨ましかったでしょう。
やがて日が経ち、ある日のこと。子どもたちから、「先生、お人形さん一人で何だか寂しそうだ
よ」「かわいそだからお友達つれてきて」「アメリカからお友達つれてきて！」の声に「ほんとうに寂
しそうね。わかった。アメリカからお友達を送つて
もらいましょうね」と園長先生に相談してもうひと
つ送つて頂きました。子どもたちは自分たちの大事
なお友達として言葉をかけたり、抱いたり、おま
ごと遊びの仲間に入れて遊んだり、もうクラスの皆
と離れられないほど仲よしになりました。

当然、お名前も、「こつちはメリーチャン、こつ
ちのお人形さんは、アメリカだからリカちゃんにし
よう」とか、「先生いつも同じお洋服ばかりでかわ
いそう」とか、食べ物のこととか、「アメリカでは

ね、ベッドで寝るんだよ、ベッド作つてやつて
「お布団は」「メリーチャンのお机はどこ?」と、
日に日に子どもたちの活動に活気が出てきました。

皆で画用紙や色紙で作れるものでなく、次第に大きなものを作ることになります。「お人形さんたちのお家がないなんて、かわいそだよ、先生!」と声をあわせて言い出します。ハイハイとその度に菊池先生は何とか間にあわせてきましたが、お家作りとなつてびっくり。どうしようと一晩ほど考え、「子どもたちが要求しているのは、ボール箱や、みかん箱ではないんだ。ちゃんとした大工さんが建てたような家でないと満足しないな!」と考えたが、さて、「自分の力でできるか」「建築の初歩から学び基礎をどうする?」「建材をどうして仕入れる?」「工具は?」。

私も仙台の浜近い家に生まれ、お転婆娘などといわれ、よく男の子と犬小屋や、かくれ小屋などを

作つて遊んだことを思い出し、「よし自力でやつてみよう」と決心して、翌日は近くの材木屋に行つて、小割とか板とか、廢材を主に注文してきた。ついでに土台の作り方などもきいてきたり、柱材の切り方などのコツも習つたりして自分でも興奮してきました。さて、皆に「皆の話、わかつたわ、先生作つてみるよ。こまつたらお手伝いしてくれる。でも、危ないことはきをつけてね」などと、相談して始まります。

五歳児は驚くことに先生が真剣だと、魂までりうつるのか、「先生、ぼくも作つてあげる」「あ、ここの、こうするといいよ」とか、驚いたことに一週間くらいして、何とか犬小屋のようなお家ができるのです。

何べんも、釘をうちまちがえて、頭がとび出したり、鋸をひいていて、指先をひつかいて血を出したたり、所々やりなおし、でも(他で)遊んでいる子が

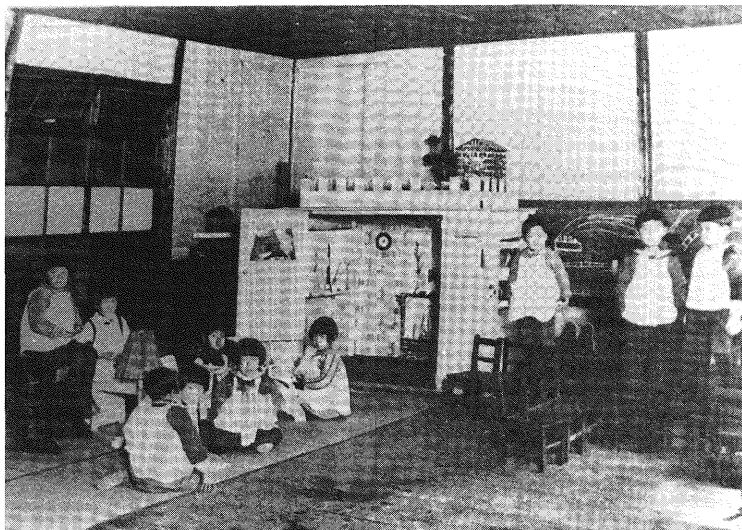
いないくらい、皆で一生懸命やりました。

色塗りは一番おもしろかった。芝居のバツクをかく時の、泥えのぐを主に、あとはニスを上塗りしたりして、ピンクのかわいいお家ができ、「窓枠はミドリにしよう」なんて言い出すので、子どもたちがみんなで塗つて、「先生、みて、みて、カッコイイよ！」なんて大さわぎ。

その夕方帰る時、私はうれしさで、家へ着くまで涙が止まりませんでした。

かわいい子ども、いたいけな子どもが、興味にのればすごい力を發揮しどんどん考える子ども。大人も考えられないような思いつきもでてくるふしげな子たち。これが私のクラスの子たち。

さてそれがきっかけで、人形のお家は、どんどん続くのです。六月頃から、とうとう翌年の卒園近い二月まで続くのです。



▲「人形のお家」

最後はお庭に牧場までてきて、あのかわいいメリーチャンたちは、大牧場持ちまでになつたというお話をでした。

この話を私は菊池先生に直接伺いましたが、その陰には言葉にならない苦心談がたくさんあつたことでしょう。

坂元彥太郎先生は、この「人形のお家」についてこんな話をされています。

一品料理とフルコース

それは丁度、東京駅からどこかへ出かける食堂車の中で向かい合いながら、坂元先生が話されたことです。「この食堂もそうだが料理にはね、一品料理とフルコースがある。一品料理はそれぞれ持ち味があつて楽しい。もう一つはフルコースの料理だ。

ステップから始まり次々と出てきて、最後はフルーツやコーヒーで終わる。フルコースは前の食べ物の味

を受けつきその味を生かしながら次の食べ物へのつながりを重視している心づかいがあるのでおいしく感じられる。保育も同様で、日頃一品型のその時で終わりという形が多いですね。菊池先生の『人形のお家』は保育のフルコース型だ。それを人変うまくおやりになつたところに大きな価値がありますね」と評されたことに、私は大変感動したことを思い出します。

菊池先生と同僚の新庄よし子先生の指導された「旅へ」という保育もまた、このフルコース型のロングランの保育で、見事なもので。新庄先生がある日、東京駅に用事で行った時に見た、客の荷物を運ぶ赤帽の人、切符を売る人、ハサミを入れる人、売店の人々など、楽しい駅の働く人々をテーマに数か月にわたるすばらしい保育となり、この発表もこの倉橋先生のこの本に出ております。

子どもが「善悪」を感じるので、 その傍らに立つこと

戸田雅美

子どもをめぐる事件が起ころるたびに、教育についてのさまざまな議論が起ころる。その中に必ず「家庭の教育力が低下した」という論調のものがある。そして、そこで

の「家庭の教育力」とは、いわゆる「しつけ」のことであり、「小さいうちから善悪の区別をしつかり教えていいからだ」ということになることが多い。これは、とてもシンプルな議論なので、いかにも正しく、当たり前のことのように感じる。

しかし、子どもと保育の場に身をおいて考えていると、「悪いことは悪い」と「教える」という、このいかにもシンプルな議論が、それほど「当然のこと」とはいえないことが見てくる。そして、子どもの立場に立つたとき、議論が simple のこととは「簡単な、わか

りやすい」という意味ではなく、「単純な、ばか者(ばかな)」という意味になってしまわないかという危惧を覚えることがある。

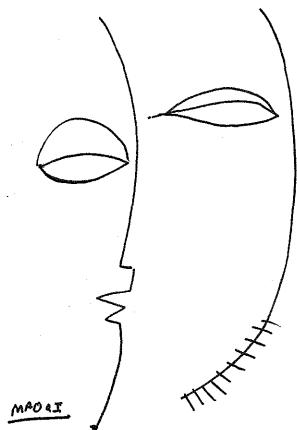
二、三歳児の子どもを連れた母親が、あれこれと叱っている場面に出会うことがある。「静かにしなさい」「走ると他の人にぶつかるでしよう」「転んだら痛くて泣くでしょう」など。もちろん、公共の場では、静かであるのが「善い」し、あちこち走り回つてはいるのは、他の人の迷惑かもしれないし、本人にとつても、転んで痛い思いをして泣くことになるかもしれないから「悪い」ことかもしれない。母親は、子どもの一つひとつでの行動が気になつて、一生懸命に「善い」ことを「教えよう」と、叱つてはいるように見える。

しかし、子どもは、目新しいものには好奇心旺盛だし、広い場所に行けば走りたいし、手ごろな高さのところを見つければ登りたくなる。これは、この時期の子どもらしいきわめて自然な姿である。おそらく、そのことは母親も理解できているはずである。にもかかわらず、「悪い」ことは「悪い」と教えねばならないと、母親も必死になつて見えて、私には、親と子どもに気の毒に思えてくる。

保育の場では、環境そのものが、子どもの自然が生かされるように整えられているため、走つたり、登つたり、にぎやかに歌つたとしても、叱られるようなことはなく、むしろ、肯定的に認められることが多い。だからといって、そこで子どもが「善い」と「悪い」ことを学ぶ機会が少ないということではない。

ある幼稚園の三歳児クラス、秋のことだった。

私は、急な泣き声に気づいて見ると、砂場のそばで、みこが、座りこんで泣いている。みこは、その朝、母親



MAO&I

の具合が悪いということで、父親と泣きながら登園してきた。やつと遊べて楽しそうにしていたのにどうしたのだろう。担任はあいにく他の子どもの怪我で手が離せない。そこで、私が、みこの話を聞くことになった。朝から泣いてきたみこが、私に話してくれるかしらと思いつがらもそばに行つてみると、みこが頭のあたりを押さえて泣いている。「みこちゃん、頭痛くしたの?」と聞いてみた。すると、「しいちゃんが髪の毛ひっぱった」と言う。「ええ? そうなんだ。それは、痛いよね!」私は、痛いというあたりを確認してみる。特に赤くなつたりはしていないが、子どもの髪の毛は細く、ひっぱられるといかにも痛そつだと、心から同情しない。

た。私の言うことが心に留まつたのか、泣き方は落ち着いてきた。そこで、「みこちゃん、しいちゃんに、何かしたの?」と聞くと、「何にもしない」と再び泣く。

泣き声や、みこと私とのやりとりが気にかかるか、

四、五人の子どもが、近くで成り行きを見ている。その

中に、しおり（しいちゃん）の顔を見つけた。しいちゃんも気になつていていたのか…と思い「しいちゃん、みこちゃんの髪の毛ひっぱつちゃたの?」と聞いてみると、あつさりと頷く。みこもじつと、しおりの様子を見ている。私は、しおりは「悪い」と気づいているのかもしないと考え、「みこちゃん、髪の毛ひっぱられて、とても痛そうだよ」と言うと、しおりはみこの様子を見る。私が「ねつ！ みこちゃん、痛そうでしょう？」と言ふと、またうなずく。

そこで、「みこちゃんに、ごめんね、する？」と聞くと「いや！ 「ごめんねしない！」と言う。そういえば、「しおりは、いつも、ごめんね、をしない」と担任が以前言つていたことをふつと思ふ出す。けれども、「もしかして、みこちゃんが、しいちゃんに、何かしたのか

な？」と聞いてみる。すると、しおりは「みこちゃんが、お玉でぶつた」と言う。見ると、確かにみこは、砂場で遊ぶときには使う遊具の玉杓子をさつきから手に持つてゐる。「このお玉で、ぶたれたの？」と聞くと、しおりは、はつきりと頷く。

みこが手に持つてゐるのは、サイズは小さいが、金属性の玉杓子である。「えつ？ みこちゃん、これで、しこちゃんのこと、ぶつたの？」と今度は、みこに聞くと、みこは、玉杓子に目を落とし、今気づいた、という表情で「ぶつちやた」と答える。私が驚いて「そうだつたんだ。でも、このお玉でぶつたら、とっても痛そうだよ！」どうして、ぶつちやたの？」と聞くと、「こうきくんが、『前に、しいちゃんがたたいたから、しいちゃんのことたたいて』って言つたから」とのこと。そういうえば、みこは、こうきとよく遊ぶ。今朝も、泣いていたみこの近くでおどけて見せて、思わず笑わせていたのはこうきだった。子どもには子どもなりの思いのつながりがあるのだと改めて思い当たる。

「でも、お玉でぶつたら痛いよね」と言うと、みこ

は、明るい声で「ごめんね」と謝る。しおりは、自分が髪の毛をひっぱったことはなかつたことのように、屈託なく「いいよ」と答える。私が「みこちゃん、よかつたね。しいちゃん『いいよ』だつて」というと、唐突にしきりが、「ごめんね」と謝る。「いいよ」とみこ。私も、「しいちゃん、よかつたね。みこちゃんも『いいよ』だつて」言うと、その繰り返しがおかしいというように、ふたりは、くくつと笑つた。ずっと、成り行きを見ていた子どもたちも、おかしい！ というようく、くくつと笑つた。その中に一人ふらふらと落ちつかなそうにしている子がいた。こうきだつた。その様子から、こくはこうきなりに「悪い」ことをしてしまつたとわかつて、氣まずそうにしているのだろうと思つた。しかし、なぜか楽しい雰囲気になつてゐるこの場では、かえつて、「ごめんなさい」とは言い出しにくそだつたし、そのいきさつを話そつとしても少し複雑で難しいのかもしれない。

そこで、私が「こうちゃん、嫌なことがあつたときは、自分で言つたほうがいいね。こうちゃんが自分で言

わなかつたから、みこちゃんも、しいちゃんも、痛いことになつちゃつたんだからね」というと、神妙な顔を二人にむけて領いた後、すかさずおどけて、二人を笑わせた。結局こうきは、謝らずに終わつてしまつた。今日のところは、これでよかつたのだろうと思いながらも、この後は担任に考えてもらうことになつた。

今振り返つてみると、私は、謝らせたいと思つてかかわつたわけではなかつた。髪の毛をひっぱることも、金属のお玉でぶつことも、人に人をたたくように頼むことも、「善惡」という区別としては「悪い」ことになるのだろう。けれども、そのことを子どもが、なるほどと納得することが、とても大事なことのように思えて傍らにいた。人と人が暮らせば、いろいろな思いのすれ違いもある。そのすれ違いを解きほぐし、何がより「善い」とだつたかと探る中に、結果的に「悪かつた」あるいは「もつと善いことができたのに」と納得するプロセスがある。このプロセスこそが、とても simple には割り切れない、保育の営みなのだろうと考えさせられた。

児童学からの出発(4)

子どもの力・親の力に支えられてその一

—東村山市幼児相談室—

馬場 教子

—相談室で親御さんの相談を受けている間、お子さんはどうしているのですか。

馬場 遊べないお子さんが多いような気がします。

部屋に入ったきりで動かない子がいたら、それにつ

き合いますが……。遊びのレベルがどうであれ、ま
ずは喜々として動いてくれていたら、こんなにうれ
しいことはありません。その場で「遊び心」が十分

動いているので、そこからつき合えそうですから。

知的な理解力に特に問題はないのに、遊べないお子
さんがいる場合、何だか悲しいですね。

—最近、よくアスペルガーとか、高機能発達障害
とか診断名が簡単につきますが。

馬場 私たちは、「今、ここでの出会い」を大切に
しています。幸いなことに医師ではないので、私た
ちは、診断はしなくていいのです。病名がついたか
らといって、本質的には何も変りません。診断が

つきましたと言われる前と直後とで、実際、何も変わっていましたから。親御さんにとって「受け入れ

がたいこと」は何も変わらないですし、お子さんに「こういうかわいさがあるな」というのが見つかっている親御さんにしてみれば、そのかわいさが変わるわけではありません。うろたえている間はそうはいきませんが、多分親御さんにとって、診断といふのは「それが全てではなく、されど診断」程度のものではないかと思います。

何人のお子さんに出会っているので、お子さんたちの「行動の質」のようなものは、私自身敏感に感じるところはあります。「人とのつき合いに最初は距離を置きたい子なんだな」「徐々につき合っていけば、今はこれぐらいだとオーケーかな」「表面的にはつき合ってくれているけれども、目はどこか厳しい」などを、瞬間、瞬間に感じる感性を、診断とは全然別のものとして、臨床に携わる者はもつて五十分つき合うのであれば、そのお子さんがこちらに発信しているものに、丁寧につき合っていき、できれば、「この人と一緒にいたことが、一人でいるよりは少しよかつた」と思つてもらいたい。「ここに来ると、この人と一緒に時間を過ごすんだ」ということを楽しみに来てもらえたらいいと思うのであります。

それに対しても、一回、二回、三回の相談では、親御さんと気持ちを合わせていくというのは、なかなか難しいですね。それも当然だと思います。長い人生の中でいろいろな思いをしてきてるから、そんなにすぐには気持ちを合わすことは難しい。ただ、私たちのところでありがたいのは、子どもは、本当にすぐにこういう場を大好きになつてくれますから、一、二回で、小さくとも不思議なぐらいちやんと覚えてくれて……。部屋、場所を何となく覚えています。

て、「この建物の入口に来たらちゃんと入ろうとした」といった行動で、お母さんたちは、「子どもがここを好きなんだな」というふうに感じてくれます。ですから、最初は子どもに引かれて相談を続けるという親御さんもいらっしゃると思います。

——何か余計に傷つくんじゃないかと思つて神経過敏になつてゐるお母さんの場合、子どもが喜んで行つてくれると、相談しやすいですね。

馬場 そうでしょうね。ですから面接をする時、その状況に応じてですが、面接室に隣接しているブレルームのドアを開けるかどうかというのは、お子さんのほうが開けておいてと言うから開けておくというのが一般的です。小さい子ですから、まずはお母さんと一緒にいたいのです。けれども、お母さんが自分の緊張に耐えられないから、お子さんとのころを開けておいてほしいケースがあります。

——子どもに寄りかかりたい?

馬場 そうです。視線も真っ直ぐに向いているよりは、ずっとお子さんの方を向いてということもあります。でもそういう形で、お母さんの気持ちを正直に表しているので、私たちも相談の内容と同様に、相談者の無意識の行動や声の調子、リズムなど、生理的なレベルでの表現にも注意を払うようにしています。

——改めて、東村山市の相談事業の特徴を簡単にご紹介いただけますか。

馬場 この相談室は最初から地域ケアという考え方でつくられていて、住民たちの希望でできた相談事業です。当時、国際障害者年のもつと前、東京都が障害児の全員就学を進めた昭和四十九年前後に、障害児をもつ親御さんたちの代表、民生委員、役所の福祉担当者などが、地域の中で「この指とまれ」的に、障害者の問題をみんなで考えていくこうと集ま

り、組織ができました。その中の乳幼児の関係者たちが、「せっかくの機会なので乳幼児のための相談事業もしてほしい」と市に提言して相談室ができました。当初から、地域の利用者の声を反映させ「子どものことなら何でも引き受けて相談に応じてくれる機関」として立ち上がったのです。年齢層も問題の種別も問わずに、どんな相談にも応じる場所は、多分他にはあまりないと思います。

もう一つは、「子どもの関係者ならだれでもどうぞ」ということで、親以外でも、幼稚園や保育所の先生、近所の人などにも、「子どもを中心置いて、どんな人でも、何か困ったと思つたら来てください」と設立の当初から門戸を開いています。

この相談事業の根本には、「子どもたちがずっとその地域で生まれ育つ」「何らかの困難さを抱えている人が、それを抱えていない人と同じぐらい住みやすい地域にしていく」「居住している地域で、い

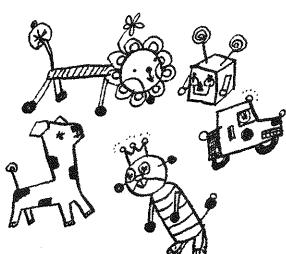
ろいろなハンディキャップをもつていても、もつてない人と同じぐらいに住みやすいという地域をつくる」という考え方があります。

東村山市でオギヤーと生まれた子が成長していくにつれてずっと、地域の中でいろいろな資源を上手に利用しながら育つていくことのお手伝いが私たちの仕事です。ライフステージごとに、子どもが必要とするサービスは違ってきます。その時に、横にずっと寄り添いながら、その子に合ったサービスを家族が選んでいけるようなお手伝いです。

——子どもを産んで育てやすい地域ですね。

東村山市の出生率はいかがですか。

馬場 東京都の減少とは対照的に、近年までずっと横ばいを保つて



いたと思います。

——こういうところがあつたら、安心して子育てでありますね。出産費用の無料化や児童手当の増額のように、各個人に子育ての責任を押しつけるような形での経済的な保障ではなく、行政が責任をもつて、住民に公平にサービスを提供するのはいいですね。

馬場 私どもの相談事業は、設置は市ですが社会福祉協議会に委託されているので、公設民営という形をとっています。利用する人は、その時には必要があつて利用するけれども、育児、子どもに関することは、順調なら人の手助けは要らないですね。何か困った時にだけ応援者がいればいいことで、あとは知らないぐらいでいいのです。市報にも、「幼児相談室でこういう相談をしています」と紹介していますが、ほとんどの人は、利用するまで、載っていることすら気がつかなかつたと言われますね。

——相談の場でお母さんたちを支えてこられて、何

を感じられましたか。

馬場 親御さんたち個々人は、一番長い人で五年ぐらい、ご自分のお子さんことで向き合います。困った話やつらい話だから、決して楽しい話ではありませんが、そうやって向き合っていかれるのはすごいことだと思います。

卒業されると、「我が子のことだけを考える親ではないお母さんたち」になつていかれているというのがすごく素敵です。自分たちが卒業してからは、「何かあつたら声をかけてください、手伝いますよ」と言ってくださるお母さんたちが地域にたくさんいらっしゃいます。

たとえば、重い障害児を抱えて二十四時間ケアしなければならないという人の、その兄弟が幼稚園に通うという時に、その送迎を先輩のお母さんたちが交代でやってくれます。それも、とてもさりげなく。「その子とまず遊んで仲よしになろうかしら

ね」という話をしながら、そのお母さんに、障害児のほうのことは何も聞きません。「今日はあっちのスーパーが安かつた」というような話をしながらチームをつくってくださいます。そういうさりげない気配りができるお母さんたちだなと思うんです。すごいですね。

——馬場先生は、いつも「お母さんたちの力に支えられています」とおっしゃっていて、どういうことかと思っていました。お母さんたちが成長していく姿を見ることが、この仕事の醍醐味だというのは、今のようなことなのです。

——そういう言葉をかけてもらえるだけで、毎日が元気になりますね。今、確かにいろいろな子育て支援があつて、どちらかというと母親をサポートする方向のものが多いのではないかでしょうか。

馬場　はい、お母さんに代わって何かをするという形でですね。

馬場　そうですね。最初は、ご自分のお子さんのよいところもなかなか見つけられないような方たちが、自信をもつて人と向き合えるようになります。見返りも期待しません。ここには、発達障害のお子さんが多く来てます。そういうお子さんの障害そのものは、ゼロになるということはないわけです

——あるいは、子育ては苦労が多くて負担が大きい

ものだからという前提で、お母さんたちをケアします。でも、そういう発想では、「子どもをどうやつてこの世の中に温かく受け入れて一緒に育てていくか」という部分が抜けているように感じます。「お母さんの苦しみを取り除くことは子どもにとつていいことだ」というふうになつていて、「子どもから発想していく」という視点が抜け落ちているのです。今のお話も、お母さんの力を引き出していくのは、お母さんに注目してケアしているのではなくて、子どもから出発しているというのをとても感じました。

とさまざまな関係機関とかかわっていきます。私はそれにつき合つてお手伝いしていくわけです。
もし「障害児保育」を利用されたいとなると、「保育所で、家族と保育所がまず出会う」というのが東村山市の制度の基本としてあるので、一緒に参加させてもらいます。そしてどうしたら、保育所側が安心して引き受けられるだろうか、家族も安心して送り出せるだろうか、ということを考え合う事前の面接にも、もちろんおつき合いします。

その後も、今度は保育所の先生も悩むことが起きてくるので、その時は、親の面接と並行して、保育所と家族との調整をずっと続けていく。時には保育所に出向いて、保育所の先生とも、このお子さんのどこが理解しにくいのか、そういうのを一緒に考えることを続けていくのです。

親御さんと保育所をつなぐ場合、こちらで代弁してあげるということではなくて、親御さんが保育所

に言いたいことがあると思うので、それを言えるようになります。

たとえば、お子さんが病気をもつてたりすると、中にはお子さんの病気のことを隠したいというお母さんもいらっしゃいます。保育所側は、日中預かるから、知りたいと思うのは当然だけれども、そういう場合でも、保育所には、「今に、お母さんが言えるようになるから、それまで待っていてください」と。保育所の先生が不安なら、アウトラインぐらいは伝えるけれども、「でも、家族からちゃんと言えるから待っていて」というふうに言い、お母さんは、言いたくない気持ちをまずお聞きしながら、お母さんの中で、「親が言うことがお子さんのためになる」と思えるまで待ちます。それからどういう言い方なら、保育所の先生に言えるだろうかということも含めて、親の面接で支援していくのです。

——大変なお仕事ですね。

馬場 そうですね。ただ、親の代わりに言うことは、簡単なことだけれども、そういうことでは問題は解決しません。代わりに言つてしまふと、一見、連携でいいようですけれども、当事者というか、親の意向や主体性が抜けてしまいます。このお母さんは、そのお子さんのことでは、また別の機関に行くわけですから、私どもは親御さんが迷いながら一つひとつ進んでいくのを、丁寧に見守つていくしかありません。

——児童学科の理想が生きていますね。「子どもと共に生きる」児童学科の原点に立ち返らせてくれる素晴らしいお話、どうもありがとうございました。

〈了〉

(東村山市幼児相談室)

インタビュー 平成十八年六月十七日
構成・首藤美香子(お茶の水女子大学)

***** 幼稚園百三十年記念企画 アーカイブズ『幼児の教育』(8) *****

今回のアーカイブズは、昭和七（一九三二）年の『幼児の教育』第三十二卷第六号に掲載された、当時の東京女子高等師範学校附属幼稚園の六クラス（五歳児、四歳児クラス各三クラス）の担任全員による、五月二十三日（月）～二十八日（土）一週間の保育日誌、「五月の一週間」からの抜粋である。

（編集部）

五月の一週間

—東京女子高等師範学校附属幼稚園に於ける保育の實際—

は し が き

倉 橋 惣 三

幼稚園は生きてゐる。その生きてゐるところを、あたりのまゝに、なまなましく記しとめたのが、之等の日誌である。保姆諸君は皆、お恥しいことでと言つてゐ

る。人に示さうとする標本でもなく、保育の型でもないのは勿論である。

しかし、その中に、私達が平生話しあつてゐる考へ

方や、心もちが、全局的に、又部分的に、おのづから實現せられてゐるものに相違ない。私としては、それが今更にうれしい。また、そこを汲み取つて下さる方があつたら、手をさし伸べて握手したいやうの氣がある。と同時に、批判と異議とも、先づ私にぶつつけて頂かなければならぬ。

各組は、同じことをしてはゐない。しかし、離れてゐる。一つの幼稚園の組々として、統制のある獨自を持してゐる。保育は一定の原理に基づけられてゐるが、その實際は、どこまでも、保母その人の創造によるものだといふのが、私達の信念である。

保育は、幼兒を保母の計畫の中へ押し込めて來ることではない。幼兒達の生活へ保母の方から赴き往くものである。しかし、それと少しも矛盾しない意味で、保母の計畫と、工夫と、考案と、準備とによつて、幼兒達の生活を一層生かしてゆくのが保育である。私達が、無計畫保育をしてゐるやうに見る人もあるかも知

れないが、とんでもないことだ。我園の保母諸君は、幼兒を頭から虜にしやうとするやうな鬼でもないが、計畫と準備をなしに其日々がやつてのけられるやうな、神通力の所有者でも大膽者でもない。

保育の計畫は、ただ考への上の立案だけではない。況んや、紙の上に書いた保育項目の次第書だけではない。幼兒達の生活が、そこから誘ひ出され、そこへ納まつてゆく、具象の實體で準備せられる。頭で計畫し、物で準備し、保育項目を放射させ、聚約させ、幼兒の生活を、生活としての自由と必然とに生かしてゆくのが計畫である。個と群とを對象にして。

それにしても、生きた保育をするために、自分も刻々に生き、且、たえず創造してゆかなければならぬ心勞と身労とは容易のことではない。しかし、さういふ保母諸君こそ、刻々に保育の實際の味を味ひ樂しむことが出来る幸福な人であらう。

海

の

組

(満五歳より満六歳、男兒十八人、女兒十人)

菊 池 フ ジ ノ

(菊池原注) この組では、昨年春から、お人形のお家を中心としていろいろの仕事を進めてまゐりました。三月の學年末までにお人形のお家がまあ完成したと申しませうか、この四月からは、そのお人形のお家の外庭の方の仕事にかゝつて居ります。外庭の方は、先づ垣根を拵へ、犬と犬小屋、それから馬や牛や豚を拵へる豫定です。そしてお馬には馬小舎を、豚と牛には柵をめぐらさうと思つてゐます。それから大きな庭樹を二三本立て、その葉や花をみんなで拵へるつもりです。尚ほ之につづいている計畫は沢山ござりますが、長くなりますが、こゝには申上げません。で、

四月から只今までに垣根が出来ました。そして之にバラを這はせてゐます。このバラがまだ半位出来ただけです。それから、お馬も出來上りました。馬小舎は出

來たばかりで、その中を塗るつもりです。それから豚は二つ出来た所、犬小屋も出来、犬は顔だけ出来、胴は今から作るところです。形が出来ると子供等は、塗り度いとせがみますのを、塗料の関係で今まで待たせてあつたので、今度塗る豫定に入れました。毎日午後にはこのお家の仕事を致しますが、都合によつて出来ない事もござります。之だけを申上げて、この週の日誌の不明を御諒解願ひ度いと存じます。

五月二十五日(水)

風強く落ちつかぬ日。

實習科生が拵へて置いたのであらう。衝立にかけてあつた五六組のやじろうべいを、朝、お室へは入るなりすかさじ發見して大悦び。おつむでも立てられる

と、誰かが自慢すると、いや、指先でも、爪先でも、お鼻の上でも出来ると自慢の仕返し。朝のしばらくは、これに打興じる。私は昨日用意して置いた、緑の模造紙の一枚貼り合せたのを出して、椿の葉を切り始めた。やじろうべいに見惚れてゐた五六人は、「何するの?」とよつて來た。

「あの太い木（お人形のお家の庭木）の葉にするの、手傳つて頂戴、椿の葉よ」と云へばみんなが喜んで鉄を出しに行く。

「かういふ形?」「これでいい、?」と口々に聞くので、お庭へ行つて椿の小枝を取つて来て、机の上に置いていた。みんなはそれを見て切り、おまけに、葉の真中から縦に二つに折つた。葉脈の所で折目のついた様になつてゐるのを表はしたのであらう。それから女の子は、バラの葉も揃えると云つて、（お人形のお家に垣根を掩へ、それに花をつけたバラを這はせた、今漸くばかり出來たところ）作り始めた。（針金四寸程の長さに緑の紙を卷いておく。子供等は之につける葉を

切り、之を一枚糊で合せながら針金に左右につける）七八人の男女の子供達はこちらには構ひなしに、お人形のお家の、お馬や豚や垣根を、好きな所に並べ代へて、自分等が乗つたりお人形をのせたり、お家へはいつたり出たりして遊んでゐる。やじろうべいの一團も流石にあきたのか、それを机の上に置いて、椿切りにやつて來た。しばらく切りつづける。やがて、もうおしまひ、と云つてみんなは去つた。次いで私はお人形のお家の人達を誘つた。「嫌!」とにべなく断られた。「あらメリースさんはね、よくこのお家に手傳つて下さる方だけがお遊びにいらして下さい、と云つてましたよ」と云ふと、仕方がないと云つた表情で鉄を出して來た。そしてほんのお義理に、三四枚の葉を切つてはまた、元の遊びに歸つて行つた。お仕事の跡を片附け、今朝用意した、けしの花の花瓶を子供等の机の上に置いて、私も子供等の後を追ふて外の空氣を吸ひに出た。見ると、元氣な一團は、龍太郎さんのリーダーの下にかけっこ最中。他の五六人は茂さん指揮で

賣店から小學校の校舎にかけてかくれんば、女の子の四五人は例によつて石けり、ずうつと幼稚園のお庭を一周りしてまた私はお室へ歸つて來た。時に十時十分過ぎ。ちょうどこゝへ、○○さんが例によつて「みんな僕を入れてくれない」と訴へて來た。この人は、豪傑組からは除外されるし、と云つておとなしいグループへも入れず毎日ベソをかいては不平をかこつ人である。或る日のこと、七八人がお砂場に大きなトンネルを作り上げて、今から積木の汽車を通さんと意氣込ん

でる時、突然そのトンネルを崩して「止ーした 今度はお團子作りをしよう」と叫んで、そばの茂さんから「○○ちゃん嫌だなあー！ 君、そんな事するからみんなから憎まれて馬鹿にされるんだよ」とたしなめられてゐたと云ふ。又或る子は「○○ちゃんは生意氣だから嫌ひさ」と云ふ。嫌ふ子供等にも理窟があるかと思はれる様になつた。で、この頃はこんな言動を見る折々に宏ちゃんをたしなめ、同時にこのグループ外の他の人達と遊ばせる様努めてゐる。（後略）

森

の

組

(満四歳より満五歳、男兒十五人、女兒十五人)

新 庄 よ し こ

(新庄原注：) 森の組は去る四月八日入園したる年少組、はじめて保育を受けしより約四十日あまりを経たる幼兒の一組。約半数の幼兒は當初より附添と離れ、その後日を追ひて附添へるもの少なくなり、今は朝別

る、時に泣く子一人、それも二三十分もたてば泣き止み得。されど他の泣くを見ても、或は何かの拍子に、とかくシクシクと泣きたくなるものは未だ二三人はあるといふ状態なり。

五月二十五日（水）

女兒九人、相連りて小學校女學校本校等歩き樹木を調べに行く、知つて居りしもの、

木 桐、松、つ、じ、あぢさゐ、いてふ、びわ、箆。

草花 すみれ、けし、しらん、金魚草、石竹、はら、スヰートピー、菊。

野菜 さやえんどう、パセリ、そら豆。

うす曇りの、しかも風の荒き日なれば大方室にあり。二人ばかり便所のた、きに電車の繪を描いて居りしかば室のボールドに伴ひ来て各色の白墨を與ふ。人が一問ほどの艦とたこといかをかきたれば二人は潛航艇を二隻。一方のボールドは赤、黄、緑等の線にて亂塗のさまなり、されどこれを見てみると、こゝは停車場、こゝはトンネル、お山だなどと云ひながら描いてゐるので自分が電車になつて、レールを走つてゐるところ、線は走つてゐるしと見えたり。それが二三人で走るのでかくはめちやめちやに見ゆれどやがてこの一線が美事なる繪となるべきはじめと思はれたる。男の子にとりて線路はかなり迷惑のあるもの、哲彦が大きな紙に線路と、走つてゐる電車の繪を描きたるがあり、この繪の前に立ちては人さし指にてレールを撫でたる子四五人を見かけたり。心の中にては走りたるなるべし。

さきのボールドの繪に引きつづきめいめい帳面に自由畫を始む。入園當初より非常に大きなる繪を描くものの四五人ありて、いつも一枚に書きつくせず、二枚つづきにするので、この為にとて立ちて大きな繪を描き得る書架を求めて與ふ。思ふ存分描くようなり、これ今は一箇なれば、兩面即ち一人づつはこれにて描く。體格検査の時休みたるもの四人、今日は揃ひたれば休養室に連れゆき身重、體重、胸圍をはかりおく。午後積木室より積木を森の組の室に一人づつ運ぶ。軍艦を作らんとてなり。されど大積木は池の組にて使い居り、どうしても借されないと幼兒に斷られしかば仕方なく、つかひ残りのみ今日は運び置く。大方よこれ

居りし故一同にて雑巾がけす。

二十六日（木）

（翌日は海軍記念日 編集部註）

軍艦。積木にて。

昨日より室に用意してありし積木に大きなる箱積木を加へて艦の土臺（二間位の大きさ）出來かかり居り（実習生作る）早朝より來たる子等是を手傳ふ。土臺の完成、欄干大砲等出來上る、次々に手傳多くなり煙

突はかようになどといふ。その他種々の注文によりなるべく是に添ふようにすれども、折角の申出が危険にて出來ぬこともあります。

是れ年長組ならば全然幼兒の發案製作に任せすべきなれど年少組なれば保母が主になります。
僕は車掌になつて乗りたいなど茂いふ、水兵さんでせうと云へばげんなる顔。今のところ海陸共に車掌の権限と思ひ居るらし。（後略）

林

の

組

（満四歳より満五歳、男兒十五人、女兒十五人）

及川ふみ

五月二十四日（火）

*晴れ（倉橋記）

（略）粘土の板を洗つたり、きりがみの後始末をしてさきに外に出た人達を氣にして窓から見ると少し形勢不穏のため床をはく事を河合さんに願つて外へ出かけ

る。通りすがりに山の組の大きな自動車にのりたいといゆので四人をのせて庭に出る。雨あがりの心地よいお天氣。砂場に一かたまり。ぶらんこに一かたまり。枠のぼりにも一かたまり。となつて遊んでゐる。今一緒に連れて出た腰巾着の三人とぶらぶらしてゐる人た

ちを集めて山の木の下に墓塚を四枚しいておまま」とをはじめた。「及川先生はお母様よ」と云はれるまことにすると丁度よい場所へ陣どつた。どこで遊んで居る人も皆見えてよい。豪傑のKさんもGさんもすべり臺の下の砂場で盛に砂を掘つてゐる。

おとうさんは何雄さんよ。と誰かがいふ。外の人達も次々とお姉様やお兄様になる。それぞれに何かしてゐる。すべての点に大人っぽいT子さんは「あらおかし

なことお母さんが及川先生でおとう様はまだ幼稚園の生徒さん、おほほ」と笑ふ。誰も氣にとめない。かたばみの實をとつてきてきうりだと出すと皆よろこんでさがしに出かける。煉瓦塀のそばに澤山ある。そのうち月子さんがどうもろこしどうもろこしともつてくれる。大ばこのつぼみで可愛らしいどうもろこしである。(後略)

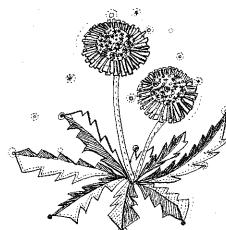
(原文は一部修正 編集部)

* * *

東京女子高等師範学校附属幼稚園は、本邦初の官立幼稚園として一八七六年に創設されたが、明治期の恩物中心の形式主義的傾向の強かつた保育を脱して、子ども中心主義的な保育を追求していた。本号で林健造先生が紹介されている菊池ふじの先生による「人形のお家」の実践も垣間みる。

☆このシリーズは今回で終わります。

(編集部)



北須磨保育センター訪問から学び得ること

—「遊び」・「保育」・「発達の保障」再考への契機—

佐治由美子
菊地知子

訪問の概容

太陽の眩しさにも気だるく渡る風にも、まだまだ

夏の名残りを感じる二〇〇六年九月初旬、私たち

は、かねてより訪れたいと思っていた北須磨保育センター訪問の機を得た。昨今の幼保一元化の大合唱が聞こえ出すはるか以前から「保育一元化」を明言

化していた守屋光雄を長として、昭和四十四年四月に神戸市須磨区の北須磨団地内に産声をあげた日本初の生活共同組合立（註1）の保育施設である。

最寄のバス停から歩いて、センター到着が九時半過ぎ。決して広くはない園庭には、すでに思い思いに遊び始めている子どもたちの姿があつた。送り届けた母親たちが、手を額にかざしながら、あるいは

木陰や玄関先で、ひとときのおしゃべりを楽しむ姿もあり、遠路よりの来訪者に気づくと、皆明るく「おはようございます」と声をかけてくれる。中には「よろしくお願ひしまーす」と言ってくださる方もいて、この場を信頼して子どもを預ける人たちの思いに違わぬ見学をしたいという気持ちにさせられた。子ども用の玄関から二階建ての建物に入ると、職員室を中心に左右に振り分けられており、聞けば右側には〇、一、二歳や一時預かり・地域の子育てグループの活動用の保育室などがあり、左側は幼保混合の三、四、五歳の保育室のことであった。

私たちちはまず、職員室わきの会議室で、事務長さんから、センターの成り立ちや現在の状況について、用意してくださった潤沢な資料を基に、地域情勢や他業種との連携なども含めて、多岐にわたる詳しい説明をしていただいた。

その後、ご自身が北須磨保育センターの出身で、現在一人目のお子さんが在籍という保護者にお話を

伺うことができた。長時間児、短時間児、どちらかがどちらかをうらやましいとか混乱するとか可愛そうに思うなどは特に無く、子どもたちは淡淡とお互に混ざり合って過ごしてきたし、わが子を見ていると現在もそうだと思うと言われた。この方は、ご自身が保育センター在園中に不幸にも父君を亡くされ、しばらく親戚に身を寄せた後でこの地に戻られた。転園することもなく北須磨保育センターに当たり前に戻ってきて「お帰りー。待つてたよ」と言われて、当時の言い方で言うところの「お昼寝組」での生活を再開できたことは、とてもありがたかったと振り返つておられたことが印象深い。

さらには、幼稚園長林先生の案内で、短い時間ではあったが、保育中の施設内を見せていただいた。各クラスには保育士と幼稚園教諭の両者が配置され、そのクラスや立場を超えて職員間で伝達を密にし、連携することの必要性とそのための努力を話された。しかし同時に、子どもたちの方はごく自然に

「ぼく長時間やし、これからお昼寝や」、とか、「短

時間はもうお部屋に集まるんやな」などと、当たり

前に確認したり、やり取りしているのだという。五歳児三クラスの子どもたちがひとつの部屋に集まり、思い思ひに、けれど熱心に、運動会について話し合う姿をわずかだが見ることができた。

勤務時間や給与体制、どの資格による勤務であるかなど、一元化施設といわれるところが必ず直面する難局を、北須磨がすっかり乗り越えてしまったわけではないだろう。しかし、少なくとも乗り越えるための連綿と続く努力と、小さからぬ何らかの結実を、垣間見たように思う。

そしてそれは、保育センター設立の理念ともいえる、今は亡き守屋光雄先生の保育觀があつてこそその結実であり努力であろうと思われる。以下に、著作『あそび保育のすすめ』を中心に守屋光雄の保育觀に触れ、「遊び」「保育」「幼児期の発達の保障」について考えてみたいと思う。

守屋光雄の保育論に学ぶ

昭和四十四年、守屋は、北須磨保育センターの創設にあたり、「幼保一元化」ではなく「保育一元化」の施設として始動させた。

守屋のいう「保育一元化」とは、幼稚園、保育所という既成の概念を越えて、新しい保育体制を創造することを意味していた。この新しい体制は、三つの権利—①乳幼児の発達権、②保育者の研究権、③働く親の労働権と育児権—が、同時保障されるものとした。そして、この理念に基づいて保育センターという一つの建物と敷地の中で、幼保の差別・分断なしに子どもの発達を保障することを根本に据えた、独自の保育が行われることとなつた（三つの権利の詳細については、紙数の関係でこれ以上立ち入ることができない）。

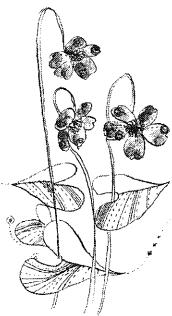
また、この新しい体制においては、保育内容・方法も当時のものを見直し、①与える保育から子ども

が能動的に活動する保育へ、②子どもの発達の量よりも質を高める保育へ、という二つのテーマから取り組んでいたという。この取り組みの中から、具体的な保育の形として生み出されたものが、当センターを特色づけている「あそびの保育」である。

「幼児の生活はあそびそのものだ。あそびを通して、子どもたちは発達するのだといわれています。

このあそびというところを、夢中になつて取り組んで

いる活動ということに置き換えるわけです。あそびというのは、ほかからの命令とか、指示、拘束、あるいは損得勘定がないものなんです。そんなことから、全く解放されたところで、新しい創造活動をする」となんですよ」と守屋は語っている。子ども



がやりたいことをやり、またそれをやり通すという過程でこそ子どもの発達が保障されると確信していた守屋は、「よくあそべ、よくあそべ、そしてもつとあそべ」と「あそびの保育」を推進していった。

ここで時代を遡るが、倉橋惣三の『育ての心』を繙いてみると、倉橋は昭和十一年、あまりにもよく知られているその序文において、次のような発達観を示している。

「自ら育つものを育たせようとする心。それが育ての心である。……中略……育ての心。そこには何の強要もない。無理もない。育つものの偉きな力を信頼し、敬重して、その発達の途に遵うて発達をとげしめようとする」。

ここで浮き彫りにされているのは、個々の子どもの発達の道筋にそつてその子どもを援助しようとする保育者の姿である。ここに、守屋の提唱した子どもの発達を保障する保育の理念をもつてきてみると、自然と重なつてくるように思えてならない。

また、守屋は、共に育つていこうとする教育を「共育」と呼び、保育する者が子どもと共に育とうしなければならないという。倉橋もまた、次のように記している。

「それにも、育ての心は相手を育てるばかりではない。それによって自分も育てられてゆくのである。我が子を育てて自ら育つ親、子等の心を育てて自らの心も育つ教育者、育ての心は子どものためばかりではない。親と教育者とを育てる心である」。

昭和十一年といえば、守屋が京都大学を卒業した年でもある。守屋はその学位論文のテーマを、「乳幼児保育の基本的状況—保育学の成立基盤」とし、保育の概念を乳幼児の発達の保障ということで捉え、そこから、保育を學問として成立させることを考えていた。この時期に発達心理学の学徒であつた守屋の保育論の下地に、大正期から昭和期にかけて日本の幼児教育理論の基盤を築いたといわれる倉橋の保育觀が根付いている可能性は高いと思われる。

このように考えてみると、北須磨の保育は、倉橋保育論の流れの中にあるお茶の水女子大学附属幼稚園の保育と、形態の違いはあれ保育の原点を辿れば通底しているような気がしてくる。しかし、この考察は、推論の域を出るものではない。今後さらに資料を詳細にあたっていく必要を感じているところである(註2)。

過去の見識との連携

～今後の保育研究へとつなぐ試み

ここに、子どもが、命令も強要も指示もなく、遊びに生きて自ら育たずにはおれないその自然の理、当然の成り行きを発達と捉え、発達を遊びによつて保障せんとする透徹した保育觀が浮かび上がる。夢中になつて取り組んでいる活動すなわちあそびに生きてこそ、子どもの発達は保障され、子どもの発達を保育において保障していくという、古くして新しい命題に、私たちはたどり着くわけである。

生活の変化や政策と呼ばれる諸所の方針の変化に
より、子どもを取り巻く状況もさまざまに変化する
今、子ども自身の何が、いかに育つことが、変わら
ず大切であり必要であるのか。過去の知恵や良識

を排除することからではなくそれに学び、それを
継承発展していく願いをもつて、私たちは考え始め
ることができるのかもしれない。

北須磨保育センターを訪問し、守屋光雄の保育観
を探つてみると、私たちもまたひとつ、光を得
たようだ。　（お茶の水女子大学）

参考文献

守屋光雄・原田碩三／共編『あそび保育のすすめ』中央
法規出版　一九八五年

守屋光雄「保育一元化—北須磨保育センターの創設」

日本保育学会編集委員会編『保育学研究』第三十五卷第一号 四五〇四八 一九九七年

守屋光雄「幼・保一元化の実践と問題点（一）～（五）」日
本保育学会第二三〇～二七回大会論文集（一）七七～七八

（二）一九〇三〇 （三）七三～七四 （四）二三三～二四

（五）二六五～二六六 一九七〇年～一九七四年

1 設立当時。現在は社会福祉法人北須磨保育センター
を事業主体とし、保育センター以外に福祉施設、介護老人
人施設、入所式知的障害者施設、在宅支援福祉センター
などの開設運営を行っている。

2 この度の訪問で守屋先生にお目にかかることができ

れば、倉橋理論との関係を直接に伺つてみたいところで
あつたが、残念なことに先生は昨年ご逝去されたという
ことであつた。

『倉橋惣二選集』三巻 フレーベル館 一九七五年

編集後記

おめでたい宴席を閉める時の司会の言葉は「終わり」ではなく「お開き」なのだろう。卒園も「終わり」ではなくて、未来に向かって開かれている。別れはさびしいが、また出会うための条件である。保育における日々の出会いを大切にする、という意味では、小さい卒業は毎日でも起こりうるのかもしれない。この3月号も、卒業を意識している。幼稚園130周年にちなんだアーカイブズの連載をひとまず終える。図書館に赴き、過去の「幼児の教育」をひも解いては、100年以上もの間、近代化と戦中・戦後の波を潛り抜け先人達が積み上げてきた、保育への熱意、実践、思考に圧倒され続けてきた。それでも今、ちゃんと自分の足で歩きはじめなさいよと背中を押されているような気がする。

(H)

幼児の教育

第106巻 第3号

平成19年3月1日発行

編集兼発行人 浜口順子

編集部 河合聰子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610

東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所 株式会社 フレーベル館

☎03-5395-6604 (編集)

振替 00190-2-19640

印刷所 図書印刷株式会社

定価 550円 (本体524円)

©日本幼稚園協会 2007 Printed in Japan

表紙絵 林 健造

「子どもの楽園」

扉カット 林 健造

「ぼくふをみてひけるんだよ 5歳」

扉題字 津守 真

カット 斎藤明子

編集委員 吉岡晶子・伊集院理子

ご購入のお問い合わせは、

フレーベル館までお願いします。

☎03-5395-6613 (営業)

次号予告

- ・新連載 保育者になりたての頃 吉村真理子
- ・小児病棟のプレールームで 河野優子
- ・三歳児の協働 浅川陽子

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。



おたより大募集

ご意見ご感想をお寄せ下さい。今月号の中で、特によかったもの、取りあげてほしい内容などもお知らせください。本誌へのご投稿もお待ちしております。
はがき：〒113-8611 東京都文京区本駒込6-14-9 (株) フレーベル館

「幼児の教育」編集部

Fax : 03-5395-6622 E-mail : youjimail@yahoo.co.jp

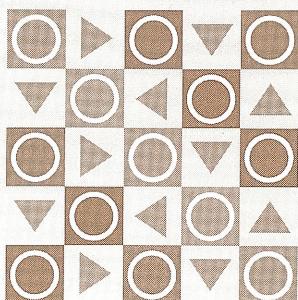
私立幼稚園の自己評価と解説

～新しい時代の幼稚園教育創造をめざして～

財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構・編

私立幼稚園の自己評価と解説

～新しい時代の幼稚園教育創造をめざして～



財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構・編

「時代のうねりの一歩先を見通して、
自己評価項目を自律的に
作成されたことは、きわめて意義深く
画期的なことである」(秋田喜代美)。
私立幼稚園界で初めての
本格的な「自己評価」についての本です。
評価項目の提示とともに、
その解説を付けました。
一目で評価項目の全体像がわかる
「一覧表」も付いています。

30×21cm／88頁
定価1,470円(税込)

397-00

● 内 容 ●

特別寄稿・幼稚園教師の資質向上と自己評価(秋田喜代美・東京大学大学院教授)
自己評価項目と解説-設置者・園長編-／自己評価項目と解説-教職員編-
自己評価表-設置者・園長編-／自己評価表-教職員編-
保育者としての資質向上研修俯瞰図

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

最新刊

New 子どもの発達と保育の原理を理解するために 現代保育学入門

諏訪きぬ 編・著



「保育の基本」から「保育の全体」が
この1冊で、よくわかる!
「最新版・保育学入門」の決定版!

21×15cm/300頁
定価2,100円(税込)

363-01

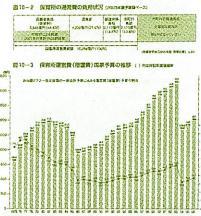


図10-2 年齢別保育対象児の数(N)(出典:厚生省)

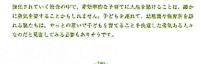


図10-3 年齢別保育対象児の数(N)(出典:厚生省)

テキストや補助教材としても
大好評の『現代保育学入門』が、
最新保育情報を取り入れて大幅に改訂!
近年の子どもを取り巻く環境の変化や
「認定こども園」など、
保育制度の矢継ぎ早の改変を見据えて、
21世紀における保育のあり方を追求しています。

もくじ

●はじめに

- 第1章 子どもと出会うということ
- 第2章 子育てにおける家庭・社会の役割
- 第3章 家族・家庭のあり方と保育サポート
- 第4章 保育者になるということ
- 第5章 日本の幼稚園・保育所の歩み
- 第6章 「育つ」と「育てる」のあいだ
- 第7章 子ども中心の生活をつくる保育
- 第8章 保育の見通しを立てるということ
- 第9章 先人が保育・教育について考えたこと
- 第10章 21世紀の保育の創造と保育の課題

諏訪 きぬ

諏訪 きぬ

諏訪 きぬ

森田 明美

齋藤 政子

村山 祐一

加用美代子

土方 弘子

古川 伸子

諏訪 義英

諏訪 きぬ

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業室総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。